

一 球丸おほの水指茶之金口蓋 一水まほじがうし

一象牙の茶杓

みづから御かよひ物したまへば、いづれも不言の唇のみにして感じあへりぬ。即御茶も手づから點び給ふれば、其様をつくしかた懸けな存する體。異國人の様引國書なく、今世佳名の風に見えむぞじる所を裏櫻な本源り。

一五疊布の玉さゆの間をもゝ玉磯枯木の繪懸り、もともと蕪なしの花入

一雷士香爐の織田主計也。茶肩衝なげうきんさむの里ちのこはる御室もす。織木勢多じよ
一勝手の舟さり野根申。特織西堂織中主。船東の餘心壁上六日。文政十日。鷹山里。ほの
主思あひほの釜を更替せらが邊の水邊過境事。一茶入尻膨

一井土ちやわん

此簡にては諸侯大夫の衆も。茶堂友阿彌は仰付らむ。御茶濟をたまはぬ御事。此處
〔時慶卿記〕慶長八年正月廿日於大坂桑山法印。近衛殿御茶申入御供申又照門聖問望門モ御同
心也。圓座肩衝出、床ニハ貴堂墨跡ヲ懸。十六クダリニ五字ヅ、在之終ニハ三字在之花弁入ガ籠
ノ花生也。其後茶過於勝手歸雁ト云葉茶壺ヲ懸御目、御茶一袋ヅ、照門聖門一門へ進上也。振廻
ハ精進分ハ座敷ニテ、魚類ハ勝手ニテ振廻也。茶ノ時ニ近衛殿御入、予モ入也。コイ茶一服吸也。薄
キヲ又御所望ニテ參也。

〔駿府政事錄〕慶長十六年十二月十四日、織田如菴有樂於御數奇屋賜御茶。日野入道唯心、山名入道
禪高爲御相伴云々。檜柴肩衝御茶入、朱衣肩衝御茶入。薄茶虛堂御掛物、古銅御花入令飾之給。大御
所○德川令入花給。有樂立御茶。十九年三月廿五日、於御數奇屋、一乘院、喜多院、東北院、阿彌陀院
賜御茶。御茶入大海。

〔梵舜日記〕元和八年十二月十三日甲戌、午刻神光院數奇屋始而振廻也。萩原予、瑛藏主、主殿、座敷四
人也。